

現代日本語の数詞と助数詞

——形態の整理と実態調査——

田 野 村 忠 温 *

Morphology of numerical expressions in contemporary Japanese

Tadaharu TANOMURA

数詞と助数詞がどのような場合にどのような形で表現されるかということは、日本語教育にたずさわる者が心得ておかなければならない基本的な知識の一つであろう。それだけに、この問題についてはすでに日本語教育の様々な現場で分析が行われているものと思われるが、詳しい記述はあまり公表されていないようである。

そこで、ここでは、現代日本語の数詞と助数詞の形態論について筆者が整理してみたところを述べることにする。日本人学生に対する概説のために用意した資料に加筆を施したもので、遺漏もあることと思われるが、上述の事情を考えればあながち無意味でもなかろうと判断し、このような形で発表する次第である。

なお、数詞と助数詞の使用の実態には、世代、方言、個人などによるゆれが少なくない。ゆれるある言い方については、大学生・短大生を対象に調査を行い、その結果を語形決定の参考資料とした。¹⁾

I 形態の整理

1 数詞

日本語の数詞には、漢語に由来するものと和語に由来するものとがある。1から10までを示せば、次の通りである。〔→IIの（調査結果1）を参照〕

漢語の数詞：

いち, に, さん, し, ご, ろく, しち, はち, く/きゅう, じゅう

和語の数詞：

ひと, ふた, み, よ, いつ, む, なな, や, ここの, とお

限られた文脈においては、英語からの借用による「ワン, ツー, スリー, ～」も用いられるが、ここでは問題としない。

1.1 漢語系列の数詞と和語系列の数詞

数詞をその起源から見ればこのように二種類のものがあるわけであるが、実際の用法においては、両者のあいだで数詞の貸し借りが行われる。

* 国文学研究室（平成元年9月30日受理）

下述するように、多くの助数詞は、漢語の数詞に付き、和語の数詞には付かない。例えば、「枚」の場合、「いちまい、にまい、さんまい、～」とは言うが、「ひとまい、ふたまい、みまい、～」とは言わない。しかし、「し」と「しち」、「いち」と「しち」が聴覚上識別しにくいからであろうか、「4枚」と「7枚」だけは、和語の数詞を用いて「よまい」「ななまい」と言うことが多い。さらに、「さん」からの類推であろうか、「よ」は「よん」となり、「よんまい」のように言うことが多い。²⁾

こうした場合の「よ／よん」「なな」は、その起源に関わりなく、文法上は、漢語の数詞と同じ資格で用いられていると考えるのが適当である。そこで、以後は、「漢語」「和語」に「系列」を加え、「漢語系列の数詞」「和語系列の数詞」という言い方をするすることにする。「和語系列の数詞」に属するのは、結局、和語の数詞であるが、「漢語系列の数詞」は、漢語の数詞だけでなく、「よ／よん」「なな」という和語の数詞をも含んだものとして定義される。

漢語系列の数詞：

いち、に、さん、し／よ／よん、ご、ろく、しち／なな、はち、く／きゅう、じゅう

和語系列の数詞：

ひと、ふた、み、よ、いつ、む、なな、や、ここの、とお

厳密に言えば、「和語系列の数詞」も、和語の数詞と言うのに完全に等しいわけではない。すなわち、漢語系列の数詞として用いられるときの「よ／よん」「なな」は、和語の数詞ではあっても、文法上、和語系列の数詞ではない。

(表1) 漢語系列の数詞と和語系列の数詞

	漢語系列の数詞	和語系列の数詞
0	れい／ゼロ	—
1	いち	ひと
2	に	ふた
3	さん	み
4	し／よ／よん	よ
5	ご	いつ
6	ろく	む
7	しち／なな	なな
8	はち	や
9	く／きゅう	ここの
10	じゅう	とお
10^2	ひゃく	—
10^3	せん	—
10^4	まん	—
10^8	おく	—
10^{12}	ちょう	—
不定	なん	いく

不定の数（ないし、疑問の数）を表す数詞には、「なん（何）」と「いく（幾）」がある。いずれも和語であるが、助数詞との組合せにおいては、前者は漢語系列の数詞、後者は和語系列の数詞として用いられる。この「なん」と「いく」、そして、0 および100や1,000などの数を表す数詞を加えると、漢語系列の数詞と和語系列の数詞の二系列は、(表1) のようになる。

現代語では、和語系列の数詞は10を超える数を表すのには用いられない。ただ、「はつか」「おおみそか」や、「はたち」「みそち」「よそち」などの化石的な言い方が行われるだけである。現代語の内部においても、世代が下がるに従って、和語系列の数詞の使用率が低下し、漢語系列の数詞の使用率が上昇する傾向がある。

なお、(表1) には含まれていないが、小さい数を漠然と表す「数」や、半分を表す「半」も、漢語系列の数詞のように用いられる。例えば、「数枚」「数時間」「数

ページ」「数十」「数百」や、「半時間」「半ページ」のように言う。ただし、「半」は、組み合わせられる助数詞の範囲が限られているほか、「半十」「半百」などとは言わない、「3枚半」のように数詞と助数詞の組合せにも加えられる、「半円」「半額」「半値」のように助数詞でないものとも組み合わせられるなど、ほかの数詞とは異なるところもある。また、「余」は、数詞「じゅう」「ひゃく」「せん」などの直後に置かれ、「50余冊」のように用いられる。「余り」「足らず」「以上」「以下」「未満」「ほど」「くらい／ぐらい」などは、助数詞があればその後ろに置かれ、「50冊余り」「3枚以上」のように用いられる。

1.2 数詞の複合

10以上の単位を表す漢語系列の数詞「じゅう、ひゃく、せん、まん、おく、ちょう」の前には、やはり漢語系列の数詞「いち、に、さん、～、きゅう」が加えられる。ただし、「いち」と「じゅう」「ひゃく」「せん」との組合せにおいては、普通、「いち」は表現されない。また、「し／よ」および「く」は、原則として用いられない。

数詞の複合の様子は、(表2)のようになる。ゴチック体で示してあるのは、前項と後項との結合に際して、いわゆる促音化や濁音化などの音変化が生じる部分である。

(表2) 数詞の複合

後項 前項	じゅう	ひゃく	せん	まん	おく	ちょう
いち	じゅう	ひゃく	せん	まん	いちおく	いっちょう
に	にじゅう	にひゃく	にせん	にまん	におく	にちょう
さん	さんじゅう	さんびゃく	さんせん	さんまん	さんおく	さんちょう
よん	よんじゅう	よんひゃく	よんせん	よんまん	よんおく	よんちょう
ご	ごじゅう	ごひゃく	ごせん	ごまん	ごおく	ごちょう
ろく	ろくじゅう	ろっぴゃく	ろくせん	ろくまん	ろくおく	ろくちょう
しち なな	しちじゅう ななじゅう	しちひゃく ななひゃく	しちせん ななせん	しちまん ななまん	しちおく ななおく	しちちょう ななちょう
はち	はちじゅう	はっぴゃく	はっせん	はちまん	はちおく	はっちょう
きゅう	きゅうじゅう	きゅうひゃく	きゅうせん	きゅうまん	きゅうおく	きゅうちょう
なん	なんじゅう	なんびゃく	なんせん	なんまん	なんおく	なんちょう

(表2)に対する例外となる言い方には、次のようなものがある。まず、特に、「歳」を用いないで年齢を言うときには、「し」を用いて、「しじゅう」とも言う。証券関係のニュースなどでは、「いっせん」という言い方や、和語系列の数詞「ふた」を用いた「ふたじゅう」「ふたひゃく」「ふたせん」「ふたまん」などの言い方も行われる。また、「四十八手」「四十九日」「(人の噂も)七十五日」「九十九里浜」などの固定した表現は、「しじゅう」「しちじゅう」「くじゅう」といった古い言い方を残している。³⁾

「～じゅう」「～ひゃく」「～せん」と、「まん」「おく」「ちょう」がさらに組み合わせられるときにも、前項は(表2)に従い、例えば、「にじゅうまん」「さんびゃくまん」「はっせんおく」「なんせんちょう」のようになる。ただ、「いっせん」という言い方が一般的でないので対し、「いっせんまん」「いっせんおく」「いっせんちょう」という言い方は普通に行われる。〔→(調査結果2)〕

1.3 「いちに」「にさん」「さんし」などの言い方

概数を表現するのに、「いちに」「にさん」「さんし」「しご」「ごろく」「ろくしち」「し

ちはち」「はちく（はっく）」のように、漢語系列の数詞を順番に二つ並べる言い方がある。このうち、「いちに」だけは、「じゅう」や「ひゃく」とは、普通、組み合わせて用いられない。

また、「さんし」「はちく（はっく）」は、後ろにはかの数詞（「じゅう」「ひゃく」「せん」「まん」「おく」「ちょう」）や助数詞が続く場合、それぞれ、「さんよ／さんよん」「はちきゅう（はっきゅう）」という形で代用されることが多い、例えは、「3,000～4,000」「8,000～9,000」は、「さんせん」「はっくせん」とも言うが、「さんよんせん」「はちきゅうせん」という言い方のほうが一般的である。ただし、「しご」を「よご／よんご」と言うことはない。（→（調査結果3））（詳細については、2.6で述べる。）

1.4 ものを数えあげるとき

ものを数えあげるときには、原則として、各数詞を二拍の形に揃える。また、和語の数詞「ひと」「ふた」「ここの」などでは、音節の脱落も生じる。（→（調査結果4））

漢語系列の数詞：

いち，にー，さん，しー／よん，ごー，ろく，しち／なな，はち，くー／きゅう，じゅう

和語系列の数詞：

ひー，ふー，みー，よー，いつ／いー，むー，なな／なー，やー，ここのつ／ここの／ここ／この／こー，とお

10を超える数を数えるには、漢語系列の数詞によるが、一般に（「ひゃく」「せん」などを除けば）三拍以上の形になる。しかし、それでも、一拍の長さを縮めることで、「1, 2, 3, ~, 11, 12, 13, ~」と同じテンポになるように（可能な範囲内で）調整を図るのが普通であろう。

1.5 「し／よ／よん」「しち／なな」「く／きゅう」

1.1で述べたように、「し」「しち」は、しばしば「よ／よん」「なな」で代用されるが、この傾向は「し」において著しい。かつては一般的であった「し」という形が用いられるのは、今日では、ものを数えあげるとき（1.4）のように後ろに助数詞が付かないとき、「さんし」「しご」の形で概数を表現するとき（1.3）、「しじゅう」と言うとき（1.2）などを除けば、「4月」「4角」「4方」「4重奏」などのなかば固定した言い方や、「四季」「四国」「四条（地名）」「四天王」などのいっそう固定した表現に限られる。また、「よ」と「よん」とでは、「よ」の使用範囲は限られてきており、一部の助数詞との組合せや、「四段活用」などの固定した表現において用いられるだけである。概して、世代が下がるほど、「し」「よ」よりも「よん」を多用する傾向があると言ってよい。

これに対し、「しち」という言い方は「なな」と並び行われているが、やはり、「なな」の使用率が高まりつつあるように思われる。もっとも、「七五三」「五七調」「七転八倒」「七福音」などの固定した表現では、今でも一定して「しち」が用いられる。

かつては一般的であった「く」という形の使用範囲も限られており、ものを数えあげるとき（1.4）のように後ろに助数詞が付かないとき、「はちく」の形で概数を表現するとき（1.3）などを除けば、一部の助数詞との組合せにおいて用いられるだけである。しかも、世代が下がるに従って「く」の使用率が低下しているように思われる。もっとも、「九分九厘」「（三十）九度の熱」「三々九度」「九条（地名）」「第九交響曲」などの固定した表現は別である。（→（調査結果5））

なお、固定した表現には、「二郎」「三郎」「六書」のように、「に」「さん」「ろく」

の特別な形を含むものがある。また、九九の唱え方においても、「し」「しち」「く」が一貫して用いられる（「しさんじゅうに」「しちくろくじゅうさん」など）ほか、被乗数の「いち」が「いん」になったり（「いんいちがいち」「いんにがに」など）、乗数の「はち」が「は／ば」になったり（「ごはしじゅう」「さんばにじゅうし」など）、「に」「さん」が特別な形になったり（「ににんがし」「さざんがく」「さぶろくじゅうはち」）する。「ろくくごじゅうし」「はっくしちじゅうに」などでは促音化した言い方も用いられ、「ごくしじゅうご」は促音拍が余分に挿入された形になっている。

2 数詞と助数詞の結合

助数詞は、(A) 漢語系列の数詞とともに用いられるもの、(B) 和語系列の数詞とともに用いられるもの、(C) 漢語系列の数詞と和語系列の数詞が併せ用いられるもの、の三種類に大別される。

本節の記述においては、nを数とすると、単に「n」と記すときは、nで終わるすべての数（整数）を表し、「# n」と記すときは、nという数だけを表すものとする。例えば、「3」は、3だけでなく13, 203, 583などの数をも表すのに対し、「# 3」は専ら3という数を表すわけである。

2.1 (A) 漢語系列の数詞とともに用いられる助数詞（その1）

まず、漢語に由来する助数詞の大半が、この類に属する。これに加え、和語の「羽わ」^か「割わり」^{がた}「組ぐみ」（～年～組」と言うときの「組」）「型がた」などもこの類に属する。

数詞と助数詞の結合に際しては、種々の音変化が起きる。その様子に基づいて、(A)

(表3) 数詞と(A)類の助数詞の組合せ（漢語の助数詞の場合）

助数詞 数詞	/t~/ 「頭」	/s~/ 「冊」	/k~/ 「回」	/h~/ 「発」	/その他/ 「枚」
いち	いとう	いさつ	いっかい	いっぽつ	いちまい
に	にとう	にさつ	にかい	にはつ	にまい
さん	さんとう	さんさつ	さんかい	さんばつ	さんまい
よん	よんとう	よんさつ	よんかい	よんはつ	よんまい
ご	ごとう	ごさつ	ごかい	ごはつ	ごまい
ろく	ろくとう	ろくさつ	ろっかい	ろっぱつ	ろくまい
しち なな	しちとう ななとう	しちさつ ななさつ	しちまい ななまい	しちはつ ななはつ	しちまい ななまい
はち	はっとう	はっさつ	はっかい	はっぱつ	はちまい
きゅう	きゅうとう	きゅうさつ	きゅうかい	きゅうはつ	きゅうまい
じゅう	じゅうとう	じゅうさつ	じゅうかい	じゅうぱつ	じゅうまい
ひゃく	ひゃくとう	ひゃくさつ	ひゃうかい	ひゃくぱつ	ひゃくまい
せん	せんとう	せんさつ	せんかい	せんばつ	せんまい
まん	まんとう	まんさつ	まんかい	まんばつ	まんまい
おく	おくとう	おくさつ	おくかい	おくはつ	おくまい
ちょう	ちょうとう	ちょうさつ	ちょうかい	ちょうはつ	ちょうまい
なん	なんとう	なんさつ	なんかい	なんばつ	なんまい

類の助数詞は、次の五つの下位類に分けることができる。

- (1) タ行音で始まるもの（以後、/t~/と表記する）
- (2) サ行音で始まるもの（/s~/と表記する）
- (3) カ行音で始まるもの（/k~/と表記する）
- (4) ハ行音で始まるもの（/h~/と表記する）
- (5) (1)～(4)以外のもの（/その他/と表記する）

それぞれの類の助数詞が数詞に続くときの様子は、おおむね、(表3)のようになる。無聲音（無声子音）で始まる(1)～(4)の類の助数詞の場合は、種々の音変化が生じるが、有聲音（有声子音または母音）で始まる(5)の類の助数詞の場合は、音変化が生じない。

/t~/、/s~/、/k~/、/h~/の類の助数詞が「じゅう」に続く場合の促音化は義務的である。「じっ」と「じゅっ」という二通りの形がある。〔→(調査結果6)〕

これに対し、「いち」「ろく」「はち」「ひゃく」（すなわち、カ行音またはタ行音で終わる数詞のうち、「しち」を除いたもの）に続く場合の促音化は、数詞と助数詞の組合せによって異なる。概して言えば、/t~/、/s~/の類の助数詞では、タ行音で終わる数詞「いち」「はち」との組合せにおいてほぼ義務的に促音化が起きる。「ろく」「ひゃく」との組合せにおける促音化の率は低い。/k~/の類の助数詞では、カ行音で終わる数詞「ろく」「ひゃく」に加え、「いち」との組合せにおいて義務的に促音化する。「はち」との組合せでも、しばしば促音化が起きる。/h~/の類の助数詞では、「いち」「ろく」「はち」「ひゃく」のいずれとの組合せにおいてもしばしば促音化（パ行音化を伴う）が起きる。〔→(調査結果7)〕

次に、各類における例外的な助数詞や問題となる言い方について述べる。

まず、/t~/の類の助数詞としては、「着」^{ちよう}「丁」^{つぶ}「對」^{つう}「通」^{つう}「滴」^{つう}「点」^{てん}「頭」^{かしょ}「等」などがあるが、特に例外的なものはない。

/s~/の類の助数詞には、「歳」^{さい}「冊」^冊「社」^{しゃ}「車線」^{しゃせん}「種」^{たね}「周」^{しゆ}「週」^{しゆ}「週間」^{しゆかん}「周年」^{せいじゅん}「章」^{しょう}「色」^{いろ}「世紀」^{せいき}「隻」^{せき}「節」^{せつ}「錢」^{せん}「艘」^{ふね}「足」^{あし}などがある。このうち、「足」は、撥音で終わる数詞（すなわち、「さん」「よん」「せん」「まん」「なん」）に付くとき、語頭音が濁音化することがある。ただし、下述する「階」「軒」「杯」「本」「羽」などでもそうであるが、「さん」などに付くときに比べ、「よん」に付くときに濁音化する率は低い。⁴⁾〔→(調査結果8)〕

/k~/の類の助数詞としては、「回」^{かい}「階」^{かい}「海里」^{かいり}「箇月」^{かげつ}「箇国」^{かこく}「箇所」^{かしょ}「箇条」^{かじょう}「卷」^{まき}「期」^{じよう}「級」^{きゅう}「曲」^{くわく}「軒」^{かしょ}「件」^{けん}「個」^こ「校」^{こう}「光年」^{こうねん}などがある。このうち、「階」「軒」は、撥音で終わる数詞に付くとき、語頭音がしばしば濁音化する。ただし、「よん」に付くときの濁音化は目立って少ない。「件」も同じ条件の下で濁音化することがあるが、「階」「軒」の場合ほどではない。〔→(調査結果9)〕

また、「1箇月」の半分は、「箇月」を用いず、「半月」と表現する。

/h~/の類の助数詞としては、「杯」^{はい}「泊」^{はく}「発」^{はつ}「版」^{ばん}「犯」^{はん}「匹」^{へき}「票」^{ひょう}「品」^{ひん}「分」^{ぶん}「遍」^{へん}「篇」^{へん}「歩」^ほ「方」^{ほう}「本」^{ほん}などがある。過半数のものは、撥音で終わる数詞に付くとき、しばしばパ行音化する（ただし、「よん」ではその率は相対的に低い⁵⁾）が、「杯」「匹」「遍」「本」は、撥音で終わる（「よん」以外の）数詞に付くとき、ほぼ義務的に濁音化する。「票」は、パ行音化させる言い方と濁音化させる言い方とが並び行われている。〔→(調査結果10)〕

/その他/の類に属する助数詞としては、「位」^い「円」^{がん}「型」^{がた}「月」^{がつ}「行」^{こう}「号」^{ごう}「合」^{あい}「時」^じ

「字」「次」「時間」「次元」「重」「叠」「台」「段」「度」「日」「入」「年」「倍」「馬力」「番」「秒」「部」「分」「分(分数)」「枚」「名」「面」「夜」「両」「厘」「類」「列」「羽」「把」「割」などがある。この類においても、いくつかの例外的な現象がある。

まず、「羽」は、撥音で終わる数詞に付くとき、しばしば「ば」になる。また、「じゅう」に付くときは、しばしば促音化を起こし、「じっぱ/じゅっぱ」となる。こうした音変化が生じるのは、この語が、元来、「はね」ないし「は」というハ行音で始まる語であったことによるものと思われる。「把」においても同様の音変化が生じるが、「羽」の場合ほどではない。〔→(調査結果11)〕

次に、「円」では、通常、「よん」は用いず、「よえん」と言う。ただ、証券関係のニュースでは、「よんえん」という言い方も多用されている。証券関係のニュースでは、「にえん」「じゅうえん」の代わりに、和語系列の数詞「ふた」「とお」を用いた「ふたえん」「とおえん」という言い方も用いられる。〔→(調査結果12)〕

「人」でも、「よん」は用いず、「よにん」と言う。「きゅう」に加え、「く」も普通に用いられる。また、「人」は、#1, #2については用いられない。すなわち、「じゅういちにん」「ごひゃくににん」などとは言うが、「いちにん」「ににん」とは言わない。

(B) 類の「ひとり」「ふたり」で代用する。ただし、食事の分量は、「いちにんまえ」「ににんまえ」とも言う。また、「(もう立派な)一人前」「二人三脚」のような固定した表現もある。〔→(調査結果13)〕

「羽」「把」「円」「人」以外では、時間に關係した助数詞に例外的なものが多い。まず、「年」においては、「よん」ではなく、「よ」を用いるのが普通である。「きゅう」と「く」がいずれも用いられる。「年生」「年度」などについても同様である。また、「半」との組合せにおいては、「年」は用いられず、「半年」となる。

「月」では、例外的に「し」を用いて、「しがつ」と言う。また、「なな」「きゅう」は用いず、「しちがつ」「くがつ」と言う。

「日」は、通常、「し/よ/よん」のいずれにも付かず、(B) 類の「か(日)」を用いて、「よっか」で代用する。また、「なな」「きゅう」ではなく、「しち」「く」を用いるのが普通である。「数日」は、「すうじつ」と言う。なお、「にち」は、「じゅういちにん」「じゅうごんち」のように、しばしば「んち」になる。「さん」に続くときは、一拍分短くなり、「じゅうさんち」のようになる。ただ、同じく撥音で終わる数詞でも、「せんにち」「なんにち」などを「せんち」「なんち」と言うことはない。〔→(調査結果14)〕

「時」「時間」でも、通常、「よん」「きゅう」ではなく、「よ」「く」を用いる。また、「7時間」は、「しちじかん」とも「ななじかん」とも言うが、「7時」は「しちじ」と言うのが普通である。(なお、同じく「じ」の音で始まる「字」「次」「次元」などでも、「よ」「く」を用いることが多い。)

2.2 (A) 漢語系列の数詞とともに用いられる助数詞(その2)

(A) 類には、漢語の助数詞に加え、「キロ」「ページ」「グラム」といった外来語の助数詞も属する。大半は、ものの個数ではなく、量的な単位を表すものである。

外来語の助数詞が数詞に続くときの音変化は、漢語の助数詞の場合と基本的には同じである。特記しておくべきことは、次の三点である。第一に、漢語の助数詞の場合と異なり、/h~/の類(「フィート」「フラン」「ヘクタール」「ヘルツ」「ホーン」など)は、タ行音・カ行音・撥音で終わる数詞に続くときにも、パ行音化や濁音化を起こさない。例えば、「さ

んフラン」であって、「さんプラン」や「さんブラン」にはならない。「じゅう」との組合せにおいては、「じゅっフィート」「ななじゅっホーン」のように促音化を起こすことがあるが、漢語の助数詞と異なり、パ行音化することはない。なお、「平方メートル」「平米」のような言い方も、漢語で始まるものであるが、この類の助数詞と同じようにふるまう。

第二に、漢語の助数詞にはなかったが、パ行音で始まる助数詞（「パーセント」「ピーペーエム(p.p.m.)」「ページ」「ポンド」など）がある。これは、「いち」「はち」「じゅう」などとの組合せにおいて、しばしば促音化を起こす。

第三に、「く」は用いられることがない。「きゅうメートル」と言い、「くメートル」とは言わない。また、「よ」もまず用いられない。「よメートル」ではなく、「よんメートル」が一般的である。

結局、外来語の助数詞は、次の六つの下位類に分けられることになる。

- (1) パ行音で始まるもの (/p~/と表記する)
- (2) タ行音で始まるもの (/t~/と表記する)
- (3) サ行音で始まるもの (/s~/と表記する)
- (4) カ行音で始まるもの (/k~/と表記する)
- (5) ハ行音で始まるもの (/h~/と表記する)
- (6) (1)～(5)以外のもの (/その他/と表記する)

/p~/、/h~/の類の助数詞の例はすでに挙げたが、/t~/の類に属するものとしては、「チャンネル」「トン」、/s~/の類に属するものとしては、「サイクル」

(表4) 数詞と(A)類の助数詞の組合せ(外来語の助数詞の場合)

助数詞 数詞	/p~/ 「ページ」	/t~/ 「トン」	/s~/ 「センチ」	/k~/ 「キロ」	/h~/ 「フラン」	/その他/ 「グラム」
いち	いっページ	いっトン	いっセンチ	いちキロ	いちフラン	いちグラム
に	にページ	にトン	にセンチ	にキロ	にフラン	にグラム
さん	さんページ	さんトン	さんセンチ	さんキロ	さんフラン	さんグラム
よん	よんページ	よんトン	よんセンチ	よんキロ	よんフラン	よんグラム
ご	ごページ	ごトン	ごセンチ	ごキロ	ごフラン	ごグラム
ろく	ろくページ	ろくトン	ろくセンチ	ろくキロ	ろくフラン	ろくグラム
しち なな	しちページ ななページ	しちトン ななトン	しちセンチ ななセンチ	しちキロ ななキロ	しちフラン ななフラン	しちグラム ななグラム
はち	はっページ	はっトン	はっセンチ	はちキロ	はちフラン	はちグラム
きゅう	きゅうページ	きゅうトン	きゅうセンチ	きゅうキロ	きゅうフラン	きゅうグラム
じゅう	じゅっページ	じゅっトン	じゅっセンチ	じゅっキロ	じゅっフラン	じゅうグラム
ひゃく	ひゃくページ	ひゃくトン	ひゃくセンチ	ひゃっキロ	ひゃくフラン	ひゃくグラム
せん	せんページ	せんトン	せんセンチ	せんキロ	せんフラン	せんグラム
まん	まんページ	まんトン	まんセンチ	まんキロ	まんフラン	まんグラム
おく	おくページ	おくトン	おくセンチ	おくキロ	おくフラン	おくグラム
ちょう	ちょうページ	ちょうトン	ちょうセンチ	ちょうキロ	ちょうフラン	ちょうグラム
なん	なんページ	なんトン	なんセンチ	なんキロ	なんフラン	なんグラム

「シーシー (c.c.)」「センチ」（および、「センチメートル」など），/k～/の類に属するものとしては，「カラット」「カロリー」「キロ」（および、「キログラム」「キロメートル」など），/その他/の類に属するものとしては，「アール」「アンペア」「インチ」「オクターブ」「グラム」「ダース」「デシベル」「ドル」「ボルト」「マイル」「マルク」「ミリ」（および、「ミリグラム」「ミリメートル」など）「メートル」「ヤード」「リットル」「ルクス」「ワット」などがある。

数詞との結合の様子は，概略，（表4）の通りである。〔→（調査結果15・16）〕

2.3 (B) 和語系列の数詞とともに用いられる助数詞

この類に属する助数詞は少数であり，重要なものは，「つ」「か（日）」「つき（月）」「り（人）」くらいである。「つき（月）」は月数，「か（日）」は日付および日数を表す。いずれも和語である。

数詞との結合の様子は（表5）のようになる。一部の組合せにおいては，音変化が生じる。⁶⁾

（表5）数詞と(B)類の助数詞の組合せ

数詞 \ 助数詞	「つ」	「か」	「つき」	「り」
ひと	ひとつ	—	ひとつき	ひとり
ふた	ふたつ	ふつか	ふたつき	ふたり
み	みつ	みっか	みつき	—
よ	よつ	よっか	よつき	—
いつ	いつつ	いつか	(いつつき)	—
む	むつ	むいか	(むつき)	—
なな	ななつ	なのか	(ななつき)	—
や	やつ	ようか	(やつき)	—
ここの	ここのつ	ここのか	(ここにつき)	—
とお	とお	とおか	(とつき)	—
いく	いくつ	—	(いくつき)	—

「つ」は，「とお」との組合せでは表現されない。

「か（日）」は，#1では用いられない。代わりに，日付ならば「ついたち」，日数ならば漢語系列の「いちにち（んち）」が用いられる。また，（表5）にはないが，#20のときには，日付，日数ともに「はつか」とするのが普通である。このように，「か」は，#2～#10，および，#20に用いるのが普通であり，例えば，「12日」「26日」は「じゅうふつか」「にじゅうむいか」とは言わず，漢語を用いて「じゅうににち（んち）」「にじゅうろくにち（んち）」と言う。ただ，「よっか」だけは，例外的に，「じゅうよっか」「にじゅうよっか」のように言う。「にち」を用いた「じゅうよにち／じゅうよんにち」などよりも一般的である。なお，古典語にあった「いくか（いっか）」という言い方はすでに死滅している。

「つき（月）」は，月数を表すのに用いられる。ただし，「ひとつき，ふたつき，みつき，よつき」あたりまでは用いるが，大きな数の場合や，不定の数の場合には，（A）類の「箇

月」によるのが普通であろう。もっとも、「十月十日」^{とつき とおか}のような固定した表現は別である。

「り(人)」(本来は「たり」)は、今日では、#1と#2の場合にしか用いられない。上述したように、(A)類の「人」は、#1, #2の場合には普通用いられず、「ひとり」「ふたり」がこれを補う形になっている。なお、「よたり(よったり)」「いくたり」という言い方はもはや用いられない。⁷⁾

以上のように、(B)類の助数詞は、原則として、#1～#10の場合に限って用いられる。「はつか」、および、「じゅうよっか」「にじゅうよっか」という言い方は、例外的なものである。また、「503日」「2010日」のような場合、「ごひゃくみっか」「にせんとおか」のように言うこともある。「百八つの鐘」「二百十日」などは、固定した表現として用いられている。〔→(調査結果17)〕

なお、「え(重)」「こと(言)」「しづく」「たび(度)」「とせ(年)」「よ(夜)」なども、この(B)類に属する。ただし、「八重桜」のような固定した表現を別とすれば、いずれも、せいぜい#2ないし#3くらいまでの小さい数にしか用いられない。

2.4 (C) 漢語系列の数詞と和語系列の数詞が併せ用いられる助数詞

この類に属する助数詞の多くは、普通の名詞、もしくは、動詞の連用形が助数詞に転用されたものである。

普通の名詞によるものとしては、

「色」「かご」「カップ」「缶」「口」「クラス」「ケース」「桁」「さじ」「皿」「試合」「シーズン」「品」「種類」「すじ」「セット」「たば」「チーム」「粒」「坪」「夏」「箱」「パック」「針」「晚」「びん」「袋」「ふさ」「冬」「部屋」「間」「棟」「目」「目盛り」「文字」「役」

などがあり、動詞の連用形によるものとしては、

「切れ」「組」「揃い／揃え」「包み」「通り」「巻き」

(表6) 数詞と(C)類の助数詞の組合せ

数詞	助数詞	「箱」	「通り」
ひと		ひとはこ	ひととおり
ふた		ふたはこ	ふたとおり
みさん	み	みはこ	みとおり
よよん	よ	よはこ	よとおり
ご		ごはこ	ごとおり
ろく		ろくはこ	ろくとおり
なな		ななはこ	ななとおり
はち		はちはこ	はっとおり
きゅう		きゅうはこ	きゅうとおり
じゅう		じゅっぱこ	じゅっとおり
ひゃく		ひゃっぱこ	ひゃっとおり
せん		せんはこ	せんとおり
まん		まんはこ	まんとおり
いく	なん	(いくはこ)	(いくとおり)
		なんはこ	なんとおり

などがある。

概して、小さい数であれば和語系列の数詞「ひと」「ふた」などが用いられ、大きい数に対しては漢語系列の数詞が用いられる。「箱」「通り」の二語について、数詞への付き方をまとめると、(表6)のようになる。「よ」「なな」は、表面的には、漢語系列の数詞とも和語系列の数詞とも考えることができるが、使用頻度の分布から判断して、「よ」は和語系列、「なな」は漢語系列と見てよかろう。

個々の場合に、漢語系列の数詞が用いられるか、和語系列の数詞が用いられるかは、助数詞によって差がある。例えば、「みはこ」「みクラス」とは言っても、「みびん」「みケース」とは言わないであろう。また、「いちしあい」とは言っても、「いちへや」とは言わないであろう。また、世代や個人などによるゆれも大きい。世代が下がるに従って、和語系列の数詞の使用率が低下する傾向がある。調査でも、例えば、「ひとはこ」「ふたはこ」は一般的であったが、「みはこ」「よはこ」などを答えた者は少数であった。

(C) 類の助数詞が漢語系列の数詞に続くときには、(A) 類の助数詞の場合に類する音変化が生じるが、これも助数詞によって一定しない。調査でも、「さんはこ」を「さんばこ」と言うとした者は少なくなかったが、「さんへや」とは言っても、「さんペや」「さんベや」などと言うことはないであろう。また、ゆれも大きい。[→(調査結果18)] なお、「晩」「夏」「冬」のような語は、大きな数と組み合わせられることがそもそも稀であろう。つまり、漢語系列の数詞に付くことが稀なわけであるから、これらは、(C) 類ではなく(B) 類に属するものと見ることもできる。

2.5 月と日の表現

月と日の表現は、漢語系列の言い方と和語系列の言い方とにまたがっており、しかも、複雑な様相を呈している。あらためて要点を整理すると、次のようになる。

まず、月の名については、(A) 類の「月」を用いる言い方があるだけである。これが# 1～# 12のすべてについて用いられる。

月数については、(A) 類の「箇月」を用いる言い方と、(B) 類の「つき(月)」を用いる言い方がある。ただし、後者は、# 10以下の数の場合に限られ、しかも、通常は、せいぜい# 3ないし# 4くらいまでの小さい数について用いられるだけである。

次に、日付を表す助数詞は、(A) 類の言い方としては「日」(または、「んち」)がある。しかし、# 1の場合は、「ついたち」という特別な言い方を用いるのが普通である。また、# 2～# 10と# 20の場合は、(B) 類の「か(日)」を用いるのが普通である。さらに、# 14と# 24でも、「日」を用いず、「じゅうよっか」「にじゅうよっか」とするのが普通である。なお、「4月1日付けで採用する」のような場合、「いっぴ」という言い方が用いされることもある。

日数については、まず、(A) 類の「日」(または、「んち」)がある。ここでも、# 2～# 10と# 20の場合、および、一の位が4の場合は、(B) 類の「か(日)」によるのが普通である。日付の場合とは異なり、「1日」を表す和語の表現はない。

2.6 「さんし」「はちく」などと数詞・助数詞の組合せ

1.3で述べたように、概数を表す「さんし」「はちく(はっく)」は、後ろにほかの数詞や助数詞が続く場合、それぞれ、「さんよ／さんよん」「はちきゅう(はっきゅう)」とも言われる。

例えば、「3,000～4,000」「3～4回」は、「さんしせん」「さんしかい」とも言うが、「さんよんせん」「さんよんかい」という言い方のほうが一般的である。「さんしせん」

「さんしかい」は、今日では用いられない「しせん」「しかい」という形を含むために、避けられるものと思われる。「人」「時間」のように、「よ」を用いて「よにん」「よじかん」と言う助数詞との組合せにおいては、「3～4人」「3～4時間」は、「さんよにん」「さんよじかん」という言い方が一般的である。〔→（調査結果19）〕

基本的には、「はちく」についても同じことが言える。「8,000～9,000」「8～9回」は、「はちくせん」「はちくかい」とも言うが、「はちきゅうせん」「はちきゅうかい」という言い方のほうが一般的である。これは、今日では用いられない「くせん」「くかい」という形を避けようとする意識が働くためだと思われる。その証拠に、「18～19の少年」などでは問題なく「はちく」が用いられる（ちなみに、「十中八九」という固定した表現もある）し、また、「9人」「9時間」のように「く」が普通に用いられる助数詞の場合には、「はちくにん」「はちくじかん」という言い方が優勢である。ただ、「さんし」と「はちく」とで異なるのは、「さんし」は「さんよ／さんよん」で置き換えれば満足できても、「はちく」は「はちきゅう」としたところで依然として不自然に思う人が少なくないということである。この「はちきゅう」の不自然さの原因は不明であるが、可能性としては、「きゅう」という言い方の新しさ、「はちきゅう」という言い方の長さ、「はちきゅう」という言い方が必要とされる度合の低さ（例えば、「8～9枚」は、「10枚ほど」「10枚足らず」と表現することもできる）といったことが考えられる。〔→（調査結果20）〕

「ろくしち」も「ろくなな」で代用されてよさそうなものであるが、この代用は實際にはそれほど行われない。これは、「し」「く」から「よん」「きゅう」への交替に比べて、「しち」から「なな」への交替の進行が遅れていることによるものであろう。すなわち、1.5でも述べたように、「し」や「く」が助数詞と組み合わせられることは今日では例外的な現象となっているのに対し、「しち」は助数詞と組み合わせられることはまだ広く行われている。このため、たとえ「7回」を「なかなかい」と言う人であっても、「ろくしちかい」に含まれる「しちかい」を特に不自然には感じないものと思われる。〔→（調査結果21）〕

以上のほか、概数の表現に関して注意しておくべきこととしては、次のようなことがある。まず、日数の表現において、「さんいち」とは普通言わないが、「にさんにち」とは言う。「いちににち」「しごにち」「ごろくにち」なども同様である。次に、「さんよっか」という言い方では、漢語系列の数詞「さん」と、（B）類の助数詞「か」が共存した形になっている。また、「ににん」とは普通言わないが、「に」と「にん」が共存した「にさんにん」という言い方は普通に用いられる。ただ、この「にさんにん」に比べて「いちににん」という言い方は一般的でなく、「ひとりかふたり」と言うのが普通であろう。

3 関連した表現形式

以下では、数詞や助数詞に関連した表現形式のうち、代表的なものについて述べておく。ただし、意味や用法に関わる問題は、ここでの目的をはずれるので、最低限の記述にとどめる。

3.1 「～め」と「第～」

助数詞の一部のもの（「位」「着」「等」など）は、数詞との組合せにおいて、順序としての数を表現する。これに対し、大半の助数詞（「本」「冊」「つ」など）は、数詞との組合せにおいて、数量の大小を表現する。

しかし、後者の種類の助数詞においても、順序としての数を表現したいということがあ

る。こうした場合に用いられる一般的な形式として、数詞と助数詞の組合せに「め」を加える言い方（例えば、「3本め」「3冊め」「みっつめ」と、数詞の前に「第」を置く言い方（例えば、「第3」「第3冊」）がある。ただし、「第」は、「第⁴_つ日」のような例外はあるが、原則として、漢語系列の数詞としか用いられない。

順序としての数を表現すると言っても、「～め」という言い方と「第～」という言い方とでは、意味が多少異なる。今、「3冊め」と「第3冊」について、その相違を強調した形で述べると、次のようになろうか。すなわち、「3冊め」という言い方が用いられるのは、複数の書物が1冊め、2冊めというように順次話し手の意識にのぼり、それが3度繰り返されたという場合（または、そうした計数意識を聞き手の意識にのぼらせようという話し手の意図がある場合）である。これに対し、「第3冊」という言い方は、そうした計数意識を明確には感じさせない。ここでは、問題の書物は、始めから順序付けられている。言い換えれば、「第1冊」「第2冊」といった表現がそれぞれの書物にあらかじめ割り当てられている。話し手はその取り決めに従って、「第3冊」という表現を特定の書物の言わば名前として用いているに過ぎない。

こうした相違に加え、「～め」は話すことば的であるのに対し、「第～」は書きことば的であるという文体的な差異もある。

なお、「第3冊め」のように「第」と「め」を併用する言い方の可能性、「第」と組み合わせられる助数詞の種類の如何、「め」と組み合わせられる助数詞の種類の如何など、「第」と「め」については検討に値する問題が残るが、省略に従う。

3.2 「～ごと」「～おき」

「ごと」「おき」も、数詞と助数詞との組合せに加えられる。ただし、「ごと」は、「日ごと」「市町村ごと」のように普通の名詞にも付くし、「会うごと」「当選が伝えられるごと」のように動詞などにも付く。また、「みっつの駅ごと」「みっつの駅おき」のような言い方も可能である。

数量に関わる場合の「～ごと」と「～おき」の意味の相違については、誰しも反省した経験があるのではなかろうか。「3冊ごと」は「2冊おき」、「3年ごと」は「2年おき」、「みっかごと」は「ふつかおき」とそれぞれ等価な関係にある。ただし、このような関係が一般に成立すると言えるのは、助数詞が離散的な単位を表すものとして捉えられた場合である。これに対し、助数詞が連続的な尺度を表すものとして捉えられた場合には、「3時間ごと」と「3時間おき」、「5センチごと」と「5センチおき」が実質上等価な関係を表すことが多いし、また、車長3メートルの車を縦一列に駐車するような状況では、「5メートルごと」と「2メートルおき」が等価な関係を表すことになる。

「～ごと」は、一つ一つの「～」に関してある事態が成立することを表すのに対し、「～おき」は、「～」という間隔においてある事態が成立することを表すということを考えれば、以上になるのも当然であろう。

3.3 「～ずつ」と「～あたり」「～につき」

これらも、数詞と助数詞との組合せに加えられる。ただし、「～ずつ」は、「少しずつ」のようにも用いられる。また、「3人の生徒あたり」「3人の生徒につき」のような言い方も可能であろう。

「ずつ」は、「3冊ずつ」「みっつずつ」のような形で用いられ、「その数量が、関係するすべてのものに均しく割り当てられることを表す」（『新明解国語辞典（第二版）』による）。その割り当てられ方は場合によって異なり、「机といすをひとつずつ用意する」

は、单一のできごとにおいて、異なる要素（「机」と「いす」）が同数であることを表すのに対し、「ひとりに1,000円ずつ与える」「3人に1冊ずつ見せる」「5～6人ずつやって来た」などは、「ひとり」「3人」「一度」といった単位ごとに、一定して同数であることを表す（以上、上掲の辞典の文例による）。

「～あたり」「～につき」などの言い方は、そのような単位を明示するのに用いられる。「ひとりあたり1,000円ずつ与える」「3人につき1冊ずつ見せる」のように言う。

II 実態調査

1 調査の方法

数詞と助数詞の使用の実態に関して、大学生・短大生166人（うち、近畿の府県を主たる生育地とする者122人）に対してアンケート形式の調査を行った。一部の項目を除き、問題となる言い方を適当な短文の文脈に入れて示し（例えば、「タバコを3箱も吸う」「8キロやせた」「東京では何泊する？」），日常の会話において下線部をどのように言うかを仮名で答えさせた。

なお、以下の記述における百分率は、誤答（例えば、「10,000,000冊」を「いちおくさつ」とする回答）などを除いたうえでのものである。

2 調査の結果

（調査結果1）「しち」と「ひち」

近畿方言では、「しち」を「ひち」とも言う。この調査では、「ひち」を含む回答は、「しち」を含む回答とほぼ同率であった。以下の記述においては、「ひち」とする回答は、「しち」とする回答に含めて扱う。

（調査結果2）「いっせんまん」と「せんまん」など

助数詞を伴わずに用いることは少ないとと思われる所以、「冊」の付く場合について調査した。

「10,000,000冊」…「いっせんまんさつ」91%，「せんまんさつ」9%

「100,000,000,000冊」…「いっせんおくさつ」81%，「せんおくさつ」19%

「10,000,000円の宝くじ」などでは、「いっせんまん」という読みの率がさらに高まるのではないかと思われる。

（調査結果3）「さんし／さんよん」「はちく／はちきゅう」と数詞の組合せ

すべて、「～円かかった」という文脈においてどのように言うかを調べた。まず、「さんし」と「さんよん」とでは、「さんよん」とする回答が大勢を占めた。

「30～40」…「さんしじゅう」19%，「さんよんじゅう」81%

「300～400」…「さんしひゃく」2%，「さんよんひゃく」98%

「3,000～4,000」…「さんしせん」5%，「さんよんせん」95%

「80～90円」「800～900円」などについては、「はちく」や「はちきゅう」を用いないで「80円か90円」「800円から900円」などのように言うとする回答が約20%あった。次に示す百分率は、そうした回答を除いたうえでのものである。「はちきゅう」が「はちく」を大幅に上回っている。

「80～90」…「はちくじゅう／はっくじゅう」20%，「はちきゅうじゅう／はっきゅうじゅう」80%

「800～900」…「はちくひゃく／はっくひゃく」4%，「はちきゅうひゃく／はっ
きゅうひゃく」96%

「8,000～9,000」…「はちくせん／はっくせん」11%，「はちきゅうせん／はっきゅ
うせん」89%

全体で、「はちく／はっく」の比率は28%：72%，「はちきゅう／はっきゅう」の比率は
95%：5%であった。

(調査結果4) ものを数えあげるときの言い方

漢語系列の数詞による数え方でゆれがあるのは、「4」「7」「9」である。

「4」…「しー」93%，「よん」7%

「7」…「しち」63%，「なな」37%

「9」…「くー」11%，「きゅう」89%

和語系列の数詞による数え方においては、「5」「7」「9」が問題となる。ただ、和語系列
の数詞ではどのように数えるかよく分からないとする回答が、「5」～「8」では約10%ずつ，
「9」では約25%あった。次に示す百分率は、そうした回答を除いたうえでのものである。

「5」…「いつ」85%，「いー」15%

「7」…「なな」73%，「なー」27%

「9」…「このつ」58%，「この」18%，「ここ」7%，「この」2%，「こー」15%

(調査結果5) 「し／よ／よん」「しち／なな」「く／きゅう」

次のような項目においては、「し」「しち」「く」の回答率が筆者（1958年岡山市生まれ）の予想を下回った。

「40過ぎ（年齢）」…「じゅうすぎ」21%，「よんじゅうすぎ」79%

「4分の1（分数）」…「しぶんのいち」0%，「よんぶんのいち」100%

「7時間」…「しちじかん」22%，「ななじかん」78%

「17日」…「じゅうしちにち（んち）」51%，「じゅうななにち（んち）」49%

「9割」…「くわり」0%，「きゅうわり」100%

「よ」の回答率も低かった。

「4枚」…「よんまい」98%，「よまい」2%

「4割」…「よんわり」100%，「よわり」0%

(調査結果6) 「じゅう」と漢語の助数詞の組合せにおける促音化

「じゅう」に /t~/, /s~/, /k~/, /h~/ の類の助数詞が続くとき、「じゅ
う」は義務的に促音化して、「じっ」または「じゅっ」になる。種々の助数詞の場合につ
いての回答を総合すると、両者の比率は 3% : 97% と、本来の言い方である「じっ」より
も、「じゅっ」のほうが圧倒的に多かった。

(調査結果7) タ行音・カ行音で終わる数詞と漢語の助数詞の組合せにおける促音化

/t~/ の類の助数詞では、タ行音で終わる「いち」「はち」の場合に促音化がほぼ義
務的である。

「1頭」…「いちとう」0%，「いっとう」100%

「6頭」…「ろくとう」93%，「ろっとう」7%

「8頭」…「はちとう」10%，「はっとう」90%

「100頭」…「ひゃくとう」74%，「ひゃっとう」26%

/s~/ の類の助数詞でも、同様である。

「1冊」…「いちさつ」0%，「いっさつ」100%

「6冊」…「ろくさつ」100%, 「ろっさつ」0%

「8冊」…「はちさつ」3%, 「はっさつ」97%

「100冊」…「ひゃくさつ」87%, 「ひゃっさつ」13%

/ k~/ の類の助数詞では、カ行音で終わる「ろく」「ひゃく」，および，「いち」の場合に，促音化が義務的である。

「1回」…「いちかい」0%, 「いっかい」100%

「6回」…「ろくかい」0%, 「ろっかい」100%

「8回」…「はちかい」47%, 「はっかい」53%

「100回」…「ひゃくかい」0%, 「ひゃっかい」100%

ただし，「いち」と「海里」「光年」の組合せにおける促音化の率は低く，それぞれ，42%，49%であった。

/ h~/ の類の助数詞では，次のようにあった。

「1発」…「いちはつ」0%, 「いっぽつ」100%

「6発」…「ろくはつ」8%, 「ろっぱつ」92%

「8発」…「はちはつ」8%, 「はっぱつ」92%

「100発」…「ひゃくはつ」5%, 「ひゃっぽつ」95%

「1本」…「いちはん」0%, 「いっぽん」100%

「6本」…「ろくほん」9%, 「ろっぽん」91%

「8本」…「はちはん」5%, 「はっぽん」95%

「100本」…「ひゃくほん」8%, 「ひゃっぽん」92%

(調査結果8) 摺音で終わる数詞と「足」の組合せにおける濁音化

「階」「軒」「杯」「本」「羽」などの場合(下述)と同様，「よん」では濁音化の率が低い。

「3足」…「さんそく」61%, 「さんぞく」39%

「4足」…「よんそく」99%, 「よんぞく」1%

「7,000足」…「ななせんそく」52%, 「ななせんぞく」48%

「70,000足」…「ななまんそく」67%, 「ななまんぞく」33%

「何足」…「なんそく」93%, 「なんぞく」7%

ただし，「階」「軒」「杯」「本」の場合とは異なり，「なん」との組合せにおいても濁音化の率がかなり低い。

(調査結果9) 摺音で終わる数詞と「階」「軒」「件」の組合せにおける濁音化

「階」については，次のようにあった。「よん」の場合の濁音化の率が低い。

「3階」…「さんかい」27%, 「さんがい」73%

「4階」…「よんかい」93%, 「よんがい」7%

「何階」…「なんかい」61%, 「なんがい」39%

「軒」についても，同様である。

「3軒」…「さんけん」24%, 「さんげん」76%

「4軒」…「よんけん」93%, 「よんげん」7%

「7,000軒」…「ななせんけん」83%, 「ななせんげん」17%

「70,000軒」…「ななまんけん」83%, 「ななまんげん」17%

「何軒」…「なんけん」51%, 「なんげん」49%

「件」では，「階」「軒」の場合に比べ，濁音化の率は全体に低い。

「70,000件」…「ななまんけん」90%, 「ななまんげん」10%

「何件」…「なんけん」90%, 「なんげん」10%

(調査結果10) 摺音で終わる数詞と / h ~ / の類の漢語の助数詞の組合せにおける音変化

「発」「泊」では、「よん」との組合せにおけるパ行音化の率が、相対的に低い。

「3発」…「さんはつ」1%, 「さんばつ」99%

「4発」…「よんはつ」37%, 「よんばつ」63%

「7,000発」…「ななせんはつ」3%, 「ななせんばつ」92%, 「ななせんぱつ」5%

「70,000発」…「ななまんはつ」22%, 「ななまんばつ」74%, 「ななまんぱつ」4%

「何発」…「なんはつ」6%, 「なんばつ」94%

「3泊」…「さんはく」1%, 「さんばく」99%

「4泊」…「よんはく」45%, 「よんばく」55%

「何泊」…「なんはく」7%, 「なんばく」93%

「分」では、「よん」でもパ行音化した言い方の回答率が高かった。

「3分」…「さんふん」1%, 「さんぶん」99%

「4分」…「よんふん」11%, 「よんぶん」89%

「何分」…「なんふん」24%, 「なんぶん」76%

「本」「杯」の濁音化については、次の通りであった。

「3本」…「さんほん」0%, 「さんぼん」100%

「4本」…「よんほん」100%, 「よんぼん」0%

「7,000本」…「ななせんほん」5%, 「ななせんぼん」95%

「70,000本」…「ななまんほん」5%, 「ななまんぼん」92%, 「ななまんぱん」3%

「何本」…「なんほん」9%, 「なんぼん」91%

「3杯」…「さんはい」0%, 「さんばい」100%

「4杯」…「よんはい」100%, 「よんばい」0%

「7,000杯」…「ななせんはい」30%, 「ななせんばい」69%, 「ななせんぱい」1%

「70,000杯」…「ななまんはい」17%, 「ななまんばい」70%, 「ななまんぱい」13%

「何杯」…「なんはい」15% 「なんばい」82%, 「なんぱい」3%

「票」のパ行音化、濁音化については、次の通りであった。

「3票」…「さんひょう」10%, 「さんぴょう」58%, 「さんびょう」32%

「4票」…「よんひょう」85%, 「よんぴょう」15%, 「よんびょう」0%

「7,000票」…「ななせんひょう」43%, 「ななせんぴょう」14%, 「ななせんびょう」43%

(調査結果11) 数詞と「羽」「把」の組合せにおける音変化

摺音で終わる数詞と「羽」の組合せにおける音変化の様子は、次のようにあった。「よん」「なん」との組合せにおいて、濁音化の率が相対的に低い。「ば」という形の回答もあったが、類推によって生じたものと見られ、比率は小さい。

「3羽」…「さんわ」40%, 「さんば」57%, 「さんば」3%
 「4羽」…「よんわ」88%, 「よんば」11%, 「よんば」1%
 「7,000羽」…「ななせんわ」28%, 「ななせんば」65%, 「ななせんば」7%
 「70,000羽」…「ななまんわ」30%, 「ななまんば」62%, 「ななまんば」8%
 「何羽」…「なんわ」73%, 「なんば」24%, 「なんば」3%
 また、「じゅう」と「羽」の組合せについては、次の通りであった。

「10羽」…「じゅうわ」42%, 「じっぱ / ジュッぱ」58%
 「把」は、使用しない者も多いようである。どのように言うか分からないとする回答を除くと、次のような比率であった。

「3把」…「さんわ」71%, 「さんば」25%, 「さんば」4%
 「4把」…「よんわ」89%, 「よんば」7%, 「よんば」4%
 「10把」…「じゅうわ」60%, 「じっぱ / ジュッぱ」40%

(調査結果12) 「よ / よん」と「円」の組合せ

「4円」…「よえん」86%, 「よんえん」14%
 「124円」などでも、ほぼ同じ比率であった。

(調査結果13) 「く / キゅう」と「人」の組合せ

「9人」…「くにん」36%, 「きゅうにん」64%
 「19人」などでも、ほぼ同じ比率であった。

(調査結果14) 「じゅうよっか」と「じゅうよにち」「じゅうよんにち」

「じゅうよっか」以外の回答が予想以上に多かった。「じゅうよんち」は、「じゅうよにち」から転じたものとも、(「じゅうさんにち」が「じゅうさんち」となるように)「じゅうよにち」から転じたものとも決められないので、独立させて数えておく。なお、「じゅうしにち」とする回答はなかった。

「14日」…「じゅうよっか」77%, 「じゅうよにち」3%, 「じゅうよんにち」14%,
 「じゅうよんち」6%

また、「じゅうしちにち」ではなく、「じゅうななにち」とする回答が予想以上に多かったことは、(調査結果5)で述べた通りである。

(調査結果15) タ行音・カ行音で終わる数詞と外来語の助数詞の組合せにおける促音化
 促音化の起きる条件は、漢語の助数詞の場合に近い。概して、/t~/ /s~/ の類の助数詞は、
 「いち」「はち」に続くときに、促音化の率が高い。

「1トン」…「いちトン」0%, 「いっトン」100%
 「6トン」…「ろくトン」97%, 「ろっトン」3%
 「8トン」…「はちトン」17%, 「はっとん」83%
 「100トン」…「ひゃくトン」20%, 「ひゃっトン」80%
 /s~/ の類の助数詞でもほぼ同様である。

「1センチ」…「いちセンチ」2%, 「いっセンチ」98%
 「6センチ」…「ろくセンチ」99%, 「ろっセンチ」1%
 「8センチ」…「はちセンチ」2%, 「はっセンチ」98%
 「100センチ」…「ひゃくセンチ」99%, 「ひゃっセンチ」1%

ただ、助数詞によって差があり、「シーシー(c.c.)」「シート」では、「いち」「はち」との組合せにおいても、促音化の率が低かった。

「1シーシー」…「いちシーシー」79%, 「いっシーシー」21%

「8 シーー」…「はちシーー」40%, 「はっシーー」60%

「1 シート」…「いちシート」76%, 「いっシート」24%

「8 シート」…「はちシート」50%, 「はっシート」50%

/ p~/の類の助数詞も、これらほど明確ではないが、似たような傾向を示す。

「1 ページ」…「いちページ」18%, 「いっページ」82%

「6 ページ」…「ろくページ」81%, 「ろっページ」19%

「8 ページ」…「はちページ」31%, 「はっページ」69%

「100 ページ」…「ひゃくページ」61%, 「ひゃっページ」39%

/ k~/の類の助数詞は、「ろく」「ひゃく」に続くときに促音化の率が高い。「キロ」の場合は、義務的である。

「1 キロ」…「いちキロ」84%, 「いっキロ」16%

「6 キロ」…「ろくキロ」0%, 「ろっキロ」100%

「8 キロ」…「はちキロ」61%, 「はっキロ」39%

「100 キロ」…「ひゃくキロ」0%, 「ひゃっキロ」100%

「1 カロリー」…「いちカロリー」73%, 「いっカロリー」27%

「6 カロリー」…「ろくカロリー」31%, 「ろっカロリー」69%

「8 カロリー」…「はちカロリー」55%, 「はっカロリー」45%

「100 カロリー」…「ひゃくカロリー」37%, 「ひゃっカロリー」63%

(調査結果16) 「じゅう」と外来語の助数詞の組合せにおける促音化

「じゅう」に / p~/, / t~/, / s~/, / k~/ の類の助数詞が続くときの促音化は義務的である。/ h~/ の類の助数詞が続くときの促音化については、次のような結果が得られた。助数詞によって、促音化させた回答の率に差がある。

「10 フィート」…「じゅうフィート」8%, 「じっフィート / じゅっフィート」92%

「10 ホーン」…「じゅうホーン」9%, 「じっホーン / じゅっホーン」91%

「10 フラン」…「じゅうフラン」13%, 「じっフラン / じゅっフラン」87%

「10 ヘルツ」…「じゅうヘルツ」35%, 「じっヘルツ / じゅっヘルツ」65%

「70 フィート」「70 ホーン」「70 フラン」「70 ヘルツ」などについても調べたが、「10~」の場合と特に違いはなかった。

(調査結果17) 「508日」「2010日」など

「開幕まであと~」という文脈でどのように言うかを尋ねた。

「508日」…「ごひゃくはちにち（んち）」64%, 「ごひゃくようか」36%

「2010日」…「にせんじゅうにち」33%, 「にせんとおか」67%

(調査結果18) (C) 類の助数詞における数詞の選択と、結合時の音変化

「タバコを～吸う」という文脈における「n箱」という言い方については、次のようにあった。「3箱」以後の和語系列の数詞の使用率の低さが目立つ。

「1 箱」…「ひとはこ」92%, 「いっぽこ」8%

「2 箱」…「ふたはこ」90%, 「にはこ」10%

「3 箱」…「みはこ」13%, 「さんはこ / さんぱこ / さんばこ」87%

「4 箱」…「よはこ」4%, 「よんはこ / よんぱこ」96%

「5 箱」…「いつはこ」1%, 「ごはこ」99%

「6 箱」…「むはこ」1%, 「ろくはこ / ろっぱこ」99%

「7 箱」…「ななはこ」100%

「8箱」…「やはこ」1%，「はちはこ／はっぱこ」99%
 「さんはこ／さんばこ／さんばこ」の比率は、44%：48%：8%，「よんはこ／よんばこ」の比率は、87%：13%，「ろくはこ／ろっぱこ」の比率は、18%：82%，「はちはこ／はっぱこ」の比率は、51%：49%であった。

「～の行き方がある」という文脈における「n通り」についても、同様の結果が得られた。

「1通り」…「ひととおり」100%，「いちとおり」0%
 「2通り」…「ふたとおり」86%，「にとおり」14%
 「3通り」…「みとおり」9%，「さんとおり」91%
 「4通り」…「よとおり」4%，「よんとおり」96%
 「5通り」…「いつとおり」0%，「ごとおり」100%
 「6通り」…「むとおり」0%，「ろくとおり／ろっとおり」100%
 「7通り」…「ななとおり」100%
 「8通り」…「やとおり」1%，「はちとおり／はっとおり」99%
 「ろくとおり／ろっとおり」の比率は、96%：4%，「はちとおり／はっとおり」の比率は、42%：58%であった。

「肉が～残っている」という文脈における「n切れ」についても、ほぼ同様であった。
 「1切れ」…「ひときれ」100%，「いちきれ」0%
 「2切れ」…「ふたきれ」91%，「にきれ」9%
 「3切れ」…「みきれ」49%，「さんきれ」51%
 「4切れ」…「よきれ」31%，「よんきれ」69%
 「5切れ」…「いつきれ」0%，「ごきれ」100%
 「6切れ」…「むきれ」1%，「ろくきれ／ろっきれ」99%
 「7切れ」…「ななきれ」100%
 「8切れ」…「やきれ」4%，「はちきれ／はっきれ」96%
 「ろくきれ／ろっきれ」の比率は、4%：96%，「はちきれ／はっきれ」の比率は、73%：27%であった。

「けがをして～縫う」という文脈における「n針」については、次のような結果が得られた。ここでは、すでに「2針」において、漢語系列の数詞が優位を占めている。

「1針」…「ひとはり」100%，「いちはり」0%
 「2針」…「ふたはり」39%，「にはり」61%
 「3針」…「みはり」17%，「さんはり／さんぱり／さんぱり」83%
 「4針」…「よはり」7%，「よんはり」93%
 「5針」…「いちはり」0%，「ごはり」100%
 「6針」…「むはり」1%，「ろくはり／ろっぱり」99%
 「7針」…「ななはり」100%
 「8針」…「やはり」1%，「はちはり」99%

「さんはり／さんぱり／さんぱり」の比率は、98%：1%：1%，「ろくはり／ろっぱり」の比率は、96%：4%であった。

概して、漢語や外来語の助数詞は和語系列の数詞との相性が悪いことであろうか、「まだ～残っている」という文脈での「n試合」という言い方においては、「1試合」から漢語系列の数詞の使用率が上回った。

「1試合」…「ひとしあい」19%，「いちしあい/いっしあい」81%
 「2試合」…「ふたしあい」8%，「にしあい」92%
 「3試合」…「みしあい」0%，「さんしあい」100%
 「4試合」以後いずれの場合も、漢語系列の数詞を用いる回答が100%であった。「いちしあい/いっしあい」の比率は、11%：89%，「ろくしあい/ろっしあい」の比率は、97%：3%，「はちしあい/はっしあい」の比率は、20%：80%であった。

「残り～になった」という文脈における「nチーム」という言い方についても、同様であった。

「1チーム」…「ひとチーム」14%，「いちチーム/いっチーム」86%
 「2チーム」…「ふたチーム」11%，「にチーム」89%
 「3チーム」…「みチーム」0%，「さんチーム」100%
 「いちチーム/いっチーム」の比率は、8%：92%，「ろくチーム/ろっチーム」の比率は、95%：5%，「はちチーム/はっチーム」の比率は、11%：89%であった。

(調査結果19) 「さんし/さんよ/さんよん」と助数詞の組合せ

「3～4回」…「さんしかい」0%，「さんよかい」0%，「さんよんかい」100%
 「3～4冊」…「さんしさつ」0%，「さんよさつ」0%，「さんよんさつ」100%
 「3～4箇月」…「さんしかげつ」0%，「さんよかけつ」0%，「さんよんかけつ」100%

「よん」ではなく「よ」が用いられる助数詞の場合は、「さんよ」という形が用いられる。

「3～4人」…「さんしにん」0%，「さんよにん」97%，「さんよんにん」3%
 「3～4時間」…「さんじじかん」0%，「さんよじかん」95%，「さんよんじかん」5%

(調査結果20) 「はちく/はちきゅう」と助数詞の組合せ

「8冊か9冊」や「8冊から9冊」といった回答を除いたうえでの百分率を示す。
 「8～9回」…「はちくかい/はっくかい」10%，「はちきゅうかい/はっきゅうかい」90%

「8～9冊」…「はちくさつ/はっくさつ」17%，「はちきゅうさつ/はっきゅうさつ」83%

「8～9箇月」…「はちくかけつ/はっくかけつ」13%，「はちきゅうかけつ/はっきゅうかけつ」87%

「く」が普通に用いられる助数詞の場合は、「はちく」という形が優勢である。

「8～9人」…「はちくにん/はっくにん」61%，「はちきゅうにん/はっきゅうにん」39%

「8～9時間」…「はちくじかん/はっくじかん」74%，「はちきゅうじかん/はっきゅうじかん」26%

(調査結果21) 「ろくしち/ろくなな」と助数詞の組合せ

「6～7回」…「ろくしちかい」92%，「ろくななかい」8%
 「6～7冊」…「ろくしちさつ」81%，「ろくななさつ」19%
 「6～7人」…「ろくしちにん」97%，「ろくななにん」3%

注

- 1) 現代語の数詞と助数詞の形態に関する比較的詳しい記述としては、上甲幹一氏「助数詞の唱えかた」(『名古屋大学国語国文学』第5号、1960年)、『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』(大蔵省印刷局、1975年。付録「助数詞一覧表」)、『NHK放送のことばハンドブック』(日本放送出版協会、1987年、「IV 数字と助数詞」)などがある。

なお、ここでは、数詞や助数詞のアクセントについては問題としない。また、現在ではあまり使われることのない助数詞(長さを表す「寸」「尺」「間」「町」「里」、面積を表す「畝」「反」「町」、体積を表す「俵」「斗」「石」、重量を表す「匁」「斤」「貫」など)は扱わない。

- 2) 「し」が避けられる別の理由として、「死」という語の音に通じるということが言われることがある。これについては、鈴木博氏「四の字嫌い考——『四』の音『シ』が『死』に通じることを忌む現象について——」(『語源探求』、明治書院、1986年)に詳しい論述がある。ちなみに、日重(1549~1623)の『見聞愚案記』(『日重上人集第一巻』、同刊行会、1979年)によると、当時、「しがつ(4月)」という言い方が避けられることもあったらしい。

又、月ヲ呼フモ、^{サツ}三月、五月ト云テ、四月ヲハ卯月ト云也。三月三日、五月五日トハ云テ、卯月八日ト云ヒナレタリ。(卷4、21才)

- 3) 現代語で「よん～」と言われるものは、少し時代をさかのぼると、一般に、「し～」(一部のものは、「よ～」)と言われていた。今日「しち～」とも「なな～」とも言われるものは、専ら「しち～」と言われていた。「きゅう～」は、原則として、「く～」であった。

例えば、明治中期に刊行されたチャンブレン(Basil H. Chamberlain)氏の *A Handbook of Colloquial Japanese* (Third Edition, London: Sampson Low, Marston, & Co., Tokyo: Shūyeisha, 1898) では、「4」「40」「400」は「し」「しじゅう」「しひゃく」、「7」「70」「700」は「しち」「しちじゅう」「しちひゃく」、「9」「90」「900」は「く」「くじゅう」「くひゃく」というとされている(103~104頁)。そして、「よん～」という言い方については、くだけた話したことばでは、「しじゅう」の代わりに「よんじゅう」と言われることがあると補足的に述べられているに過ぎない(106頁)。「なな～」についても、

商売人はよく「しちじせん」の代わりに「ななじせん」と言うが、こう言わなければならないものでもないし、品のある言い方でもない。

という補足があるだけである(107頁)。「きゅう～」についてはそうした記述さえない。

1604~1608年刊のロドリゲス『日本大文典』(土井忠生氏訳、三省堂、1955年)や、1623年刊のコイヤード『日本語文典』(大塚高信氏訳、坂口書店、1934年)などの記述からも、一般に「し～」「しち～」「く～」という言い方が用いられていたことが知られる。

- 4) 「よん」と助数詞の組合せにおいて濁音化率が低いのは、(注3)でも述べた、「よん～」という言い方の新しさによるものと思われる。ロドリゲス『日本大文典』では、例えば、「階」は「にかい、さんかい、しかい、ごかい」、「寸」は「いっすん、にすん、さんずん、しすん、ごすん、～」のように言うとされている(781, 798頁)。チャンブレン氏の上掲書はこうした点について必ずしも明示的でないが、その記述から判断して、同様の言い方が行われていたものと想像される。このことから、古くより行われている「さんがい」という言い方に対し、「よんがい」という言い方は、「しかい」の「し」が「よん」で置き換えられるようになったときに、「よんかい」となるところが、「さんがい」からの類推によって生じたものと推定される。

数詞の「ひゃく」「せん」が、「さん」「なん」に続くときには濁音化して「さんびゃく」「な

んびゃく」「さんぜん」「なんぜん」となるのに、「よん」に続くときには濁音化せず「よんひゃく」「よんせん」になるという事実も、同様に理解することができる。

なお、「艘」^{そう}も、撥音で終わる数詞との組合せにおいて濁音化する助数詞であったが、今日の若い世代においては、濁音化させない言い方が一般的である。（注3）に挙げた文献などの記述から確かめ得るものだけでも、「艘」のほかに、/s~/の類では「尺」「升」「寸」、/k~/の類では「箇国」「箇所」「卷」「貫」「斤」「間」、/t~/の類では「反」「町」「斗」などが、過去においては同様に濁音化する助数詞であった。実際にはさらに多くの助数詞が濁音化していたことは確実である。「三箇日」「三国同盟」のような固定した言い方も、そのことを物語るものと言ってよい。こうしたことから考えて、撥音で終わる数詞との組合せにおける濁音化の現象は衰退の過程にあり、数詞の「ひゃく」「せん」と少數の助数詞「足」「階」「軒」「杯」「本」などだけにそれが残っているのが現在の段階であろうと思われる。

- 5) 「よん」と/h~/の類の助数詞の組合せにおけるパ行音化の率が低いのは、（注4）で述べた、「よん」と助数詞の組合せにおける濁音化率の低さと同じ事情によるものと推定される。すなわち、「しほつ」という言い方が「よんはつ」で置き換えられるようになったときに、すでに存在していた「さんばつ」からの類推によって生じたのが、「よんばつ」という言い方であろうと思われる。
- 6) 「か(日)」の場合に数詞の部分の音変化が多い。これは、安田尚道氏「日数詞(上)(下)」(『国語と国文学』第49巻第2号、同第3号、1972年)の考証によると、「ふつか、みっか、よっか、~」における助数詞は、本来、「か」ではなく、「*-uka」であったからである。「ふつか」「むいか」「なのか」「ようか」などにおいて数詞が例外的な形をとっているように見えるのは、数詞と'*-uka'の組合せに対して、種々の要因による音変化が起きた結果として説明されるのである。
- 7) チャンブレン氏は、「よん」よりも「よったり」という言い方のほうが一般的であると述べ、次のような対話の例を挙げている(112~114頁)。

おいくたりでございます?——よったりです。

付記 奈良大学リポジトリへの掲載にあたり以下の通り訂正する。内容上補いたい点もいくつかあるが、差し当たり製版上のミスの訂正にとどめる。(2011年10月)

209頁最下行の次に以下の3行を追加

「3件」…「さんけん」82%、「さんげん」18%
 「4件」…「よんけん」96%、「よんげん」4%
 「7,000件」…「ななせんけん」93%、「ななせんげん」7%

213頁中程

「にきれ」→「にきれ」9%